研究者として何ができるのか ❸

震災での体験が全ての始まり
人と人の絆が「水ボラ」を支えてくれた

interview

千葉 啓子 名誉教授

東京教育大学体育学研究科修士課程および東北大学医学研究科衛生学博士課程終了。2009年から岩手県立大学盛岡短期大学部生活科学科の教授を務め、2020年からは八戸学院大学健康医療学部人間健康学科にて教授に就任した。

「水ボラ」の参加者たちと黒崎神社鳥居前で撮影した解散式の集合写真

「津波が来ている。逃げろ」避難所で聞いた叫び声

2011年3月11日、私は大槌町にある赤浜漁協で衛生に関する講演を予定していました。当時は盛岡短期大学部の生活科学科で教授を務めていて、この講演は数年、休漁期の2月に開催されてきましたが、この年は不漁で水産加工業の方々の時間が確保しやすかったことと、私の仕事の都合もあり日程を3月にずらしての開催になりました。

当日の昼過ぎに現地に向けて車で出発。その日はよく晴れていて、到着した漁協の3階から眺めた海がとても穏やかだったのを覚えています。14時半を過ぎた頃から参加者の皆さんが続々と会場に入ってきたのですが、地震はそのすぐ後に起こりました。一緒にいた大槌町役場の職員の方が「まずは屋上へ」と私の手を引こうとしたのですが、あまりに激しい揺れでとても立っていられる状況ではありません。やがて建物自体も危ないということになって、大槌町立赤浜小学校へ車で移動しました。おそらくその時点では、多くの人の頭には「津波」の文字は浮かんでいなかったと思います。

小学校の児童たちは校庭に集められていて、地域の人たちも次々とやってきました。私は指定された避難所だからもう大丈夫かなと思い、東京に住んでいる姉家族へ連絡。なんとか電話がつながって「揺れは大きかったけど無事です。大丈夫」と伝えていたら、山の上の方に逃げていた住民の方々から「津波が来ているから逃げろ」と叫ぶ声が聞こえたんです。そこからは一斉に、まるで蜘蛛の子を散らすように逃げました。私は小学校の2階なら大丈夫かと一度は階段を上りかけたんですが、とっさに2階も危険かもしれないと思い学校裏のフェンスを乗り越え、お墓が沢山ある小山へと走りました。そのすぐ後に津波は赤浜小学校を乗り越えて、私が避難した小山のすぐ下まで押し寄せたのです。あの時、津波そのものは見ませんでしたが、後ろから土煙とギシギシ音を建てて家を壊しながら迫ってくる波の気配を感じながら必死で逃げました。

見ず知らずの人に助けられてやっとの思いで盛岡へ

水が引いた後は、かろうじて津波の被害を免れた近くの印刷会社に多くの人が身を寄せました。30畳ほどのスペースに高齢者の方と女性が優先的に休ませてもらったものの、横になる空間もないくらいの人であふれていました。ありったけのロウソクをつけていましたが、余震の衝撃で戸がふさがらないようにと隙間を開けていたこともあり、とても寒い状況の中でまんじりともせず一夜を明かしました。

翌日は避難していた人たちと一緒に、水が引いた浜へ転がっている鍋などを拾いに行きました。印刷会社より少し高台にあるお米屋さんが在庫の米を提供してくれて、それを煮炊きして食べたんです。もちろんお腹いっぱい食べられるわけもなく、隣にいた女性とおにぎり1個を分け合って食べました。それが震災後、初めて口にした食べ物です。そこでは地元の人も私のような外部から来た人間も、分け隔てなく接してもらえて本当にありがたい場所でした。それでも私は、大学などの皆さんがきっと心配している、なんとかして連絡をつけなければと思い、生存者確認のために回ってきた役場の職員さんに頼んで、対策本部が置かれていた城山公園体育館へと移ったのです。

500人以上もの人たちが避難していた城山公園体育館では、釜石市に住む父と娘の親子連れに出会いました。その親子さんのご自宅は無事だったそうで、大槌町に住む親戚や知人を訪ねて缶詰などの食料を差し入れていました。私は迷惑なことと承知しながらも、その親子さんに外部と連絡を取るために公衆電話がある所まで連れて行ってもらえないかと相談をしたんです。すると快諾してくださって、遠野市にある道の駅「風の丘」まで車で連れて行ってくれました。ガソリンを入手することさえ難しい状況下で申し訳ないと、たまたま手元に残っていたお金を渡そうとしたのですが「お互い様だから」と言って受け取られませんでした。私は道の駅で連絡を取った知人に迎えに来てもらって、無事に盛岡まで戻ることができました。この時、助けてもらった親子さんには後になって御礼に伺うことができ、今でも年賀状などのやりとりを続けています。

また当日、同じ漁協にいて途中まで一緒に逃げた大槌町役場の職員の方も、役場へ戻る途中の橋が落ちていたため引き返したそうで、後日、無事に再会を果たすことができました。当時はお互いに「自分と一緒に来ていれば助かっただろうに」と思っていたので、もう一度お顔を見ることができたのは奇跡としか言いようがありません。

学生とともにスタートさせた「水ボラ」の活動

当時、岩手県立大学のスタッフの中で、安否確認ができていない最後の一人が私でした。大槌町から戻って大

学へ顔を出すと、普段は沈着冷静な先生までもが「千葉くん、生きてたのか！」と駆け寄ってきてくださいました。あの惨状の中、無事に戻ることができたのはさまざまな人との出会いがあったからで、本当に運が良かったのだと思います。こうした私の一連の経験が、やがて「水ボラ」への原動力となっていきました。

大槌町や津波で壊滅的な被害を受けた陸前高田市は、もともと湧き水に恵まれた地域です。震災後、しばらくは断水状態が続いていて、住民の方々は湧き水を汲んで飲水などに使用していました。その事実を知った私は「そのまま飲んでは食中毒などの危険がある」と危惧しましたが、現地に保健師として働いていた方がおいでになり、きちんと煮沸した上で利用していました。その後、盛岡に戻ってから「何か自分にできることはないか」と考えていた時、現地の水道復旧の目処が立たないことを知り、現地で昔使っていた井戸に塩素を入れて、飲水可能かチェックをして回ったらどうだろうかと思いついたのです。しかしそのことを岩手県環境生活部の方に相談すると、井戸水の水質検査には資格が必要だということを教えられました。そして「もしそういった活動をしてもらえるのなら」と打診されたのが、支援物資として大量に届いているペットボトルの水を被災地へ届ける取組だったのです。

その頃、沿岸地域はもちろん岩手県全体が混乱の渦中にあり、職員の皆さんも非常事態の中で休む間もなく働いていました。全国各地から物資が続々と到着するのですが、手が回らずに現地へ配布できない状況にあったのです。そこで私は岩手県立大学の学生とともに、被災地へ支援物資の水を届ける活動「水ボラ」をスタートさせました。

時間の流れとともに深まる地域住民とのつながり

最初に活動を始めたのは震災からおよそ2カ月が過ぎた頃で、当初は自分が被災した大槌町へ行こうと思いましたが、そこにはすでに別のボランティアグループが入り支援活動を始めていました。岩手県に相談をしたら陸前高田市が一番厳しい状況で、特に広田半島は支援の手が入りにくい場所なのでまずはそこへ行ってほしいと言われました。

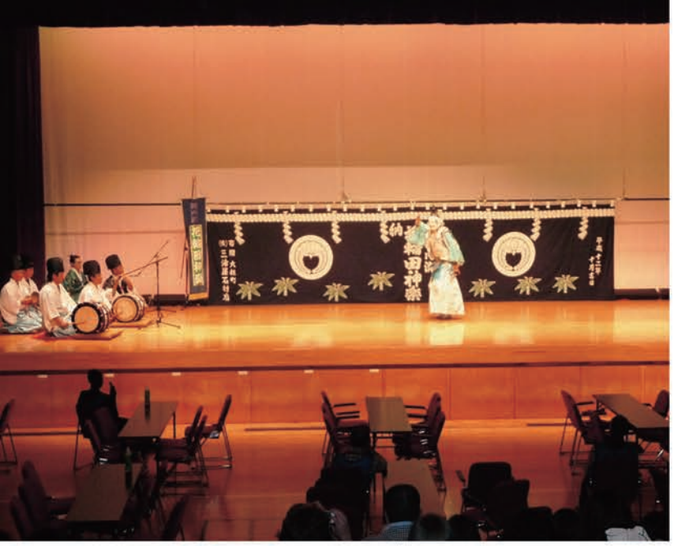
震災当時、広田半島は孤立状態に陥っていて、多くの住民が取り残されていました。高台にあるオートキャンプ場「モビリア」が避難所として提供され、消防庁や保安庁のヘリコプターに見えるよう、石灰でSOSという文字と着陸可能な地点を示してどうにか救助へとつなげた地域です。私たちはそのモビリアに10tトラックで運ばれたペットボトルの水が入ったダンボールを1000箱ほど下ろして基地とし、広田半島の各世帯や仮設住宅へと配布しました。活動を始めた最初の頃は、お水を届けてもあまり表に出てこられない方がほとんど。それが続けるうちにだんだんとお顔を見せてくださるようになって、なかには「せっかくだから一緒に写真でも撮るか」って言ってくれる方もいて、時間が経つごとに距離が縮まっていくのを感じていました。

私は自分自身の経験から、現地に行ってその場に立ち、自分の眼でながめその場所の空気を体感することが大切だと考えています。いくら映像や資料を見たとしても、自分が現地で活動し、感じることの方が何倍も大きなインパクトがあります。「水ボラの活動に参加して良かった」という学生の声も多く、回数を重ねることに自ら積極的に住民の方々とコミュニケーションを取ったり、折に触れて連絡を取り合ったりする人も出てきました。被災した現地の方々は、同じ地域の者同士では暗い話になる一方だけど、学生たちが元気に声をかけてくれると、例えわずかな時間だとしても明るい気持ちになれるとおっしゃっていました。水ボラはスタートこそ生きていく上で必要な水を届けることを活動の目的としていましたが、時間とともに変化し、学生と地域住民の方々とがコミュニケーションを深めるためのツールの一つになっていったのです。

翌年の夏には中部大学へ留学中のオハイオ大学生と教員も水ボラに加わり、二泊三日の泊りがけの支援活動に発展しました。

多くの人に支えられた10年とこれから目指すべき未来

やがて震災から1年半ほどが過ぎると、ひとまず一定のライフラインが復旧したということで水の支援物資が届かなくなりました。しかしその時点における被災地の現状は、日常とはかけ離れたまま。特に仮設住宅の水道設備は配管が道路にむき出しの状態で作られていたことでなまぬるく、塩素臭が強く蛇口から出る水をそのまま飲めないでいる人も多くいました。熱中症の心配もあったことから私はまだその段階で水の支援を止めるべきではないと感じ、配る水の提供をしてくれる企業を探し、いろいろと相談して回りましたがなかなか思うようには進みませんでした。



そんな矢先、日本を代表する清涼飲料水メーカーである株式会社伊藤園の関係者の方々が水の支援を申し出てくださったのです。伊藤園の創設者である本庄正則氏は平成8年に本庄国際奨学財団を設立し、国内外の実力のある若者に対する奨学援助をされています。東日本大震災後、被災3県の大学を毎年訪問し、寄付を続けてくださっていますが、その折、私が支援物資の水を求めていることを聞いて即、協力を申し出てくださいました。水ボラにも財団の留学生たちに声をかけ「勉強だけでなく社会的活動にも関わってほしい」と言って参加を促し、毎回のように東京から足を運んでくれました。

オハイオ大学、本庄国際奨学財団留学生などの参加は、やがて毎夏の「合同水ボラ」となり、100名を超える国際色豊かな学生たちの被災沿岸訪問が定着しました。伊藤園からお茶のソムリエの方に来ていただいて現地の公民館で地域の人たちに向けた「お茶セミナー」や、岩手県立高田高校の茶道部の生徒たちがお茶を点てるなどといったイベントも開催しました。これには岩手県立大学の有志の先生方や企画本部の方々の国際交流を含めた企画運営に対するきめ細やかなサポートがありました。言葉に尽くせない程感謝しています。合同ボラでは地元の民俗芸能を鑑賞する機会を設けるなど、水ボラ全体としての内容もだんだんと変化していきました。

そういった皆さんの協力があったからこそ、10年間も活動を続けることができたのだと思います。私たちが一番理想とするのは、地元の人たちから「もう来なくても大丈夫」と言ってもらえること。しかしながら10年が過ぎた今でも仮設住宅は必要とされているのが現状です。瓦礫は撤去され土地の造成は進み、立派な道路も完成しました。確かに街は生まれ変わろうとしているのですが、そこで暮らす人々の思いはどうでしょうか。私は復興が進むことと昔ながらの人の絆や生活が戻ることは、必ずしもイコールではないと考えています。そういったことをどうしていくのかが、今後の大きな課題になるのではないかと思っています。

水ボラにはさまざまな国からの留学生も参加

東日本大震災津波から10年が経った今、私は岩手県立大学を退職しましたが、引き続き地域連携本部に所属し、微量元素摂取と健康との関係について研究しています。退職2年後に八戸学院大学に再任用されたこともあり、水ボラに関わる機会は以前よりは少なくなりました。しかし、緊急的に水が求められることがなくなった今でも、人と人とのつながりを持つために水ボラの活動は必要ではないかと思います。もちろん街の復興は大前提としてありますが、便利さを重視するあまり現地で暮らす人々の気持ちが二の次になってしまうことは避けなければなりません。生きていく上で人とのつながりは重要なもの。私自身、こうした形で震災を経験し、そのことを痛感しました。

また高等教育機関である大学の立場から見ても、復興教育に終わりはありません。いつかまた、どこかで天災は発生する。そうした時に学生たちがニュースを見てわかったつもりになるのではなく、現地へ行って人を思いやる行動ができるようになってほしいと願っています。やろうと思うだけでなく、行動に移すことで形になっていくものがある。震災を通して学んだことを、私自身も今後に生かしていきたいと思っています。